研究成果の公開――最近開催されたシンポジウムから

科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」

公開フォーラム

「タイムマシンとしてのアステカのモニュメント――考古学的石碑の新しい解釈」

日時：2015年6月2日（火）
場所：国立民族学博物館
主催：科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」計画研究A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」研究班
企画：鈴木　紀（国立民族学博物館）

本フォーラムは、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」の一環として開催された。同研究は、アメリカ大陸の先スペイン期に栄えたメソアメリカ文明とアンデス文明の地域間比較および考古学・自然科学・歴史学・文化人類学等の研究成果の学際的比較を通じて、古代アメリカ文明に関する新しい研究領域の開拓を目指している。フォーラムを主催した計画研究A04班は、歴史学・文化人類学の視点から古代アメリカ文明の研究を試みている。

フォーラムでは、メキシコから歴史学者のフェデリコ・ナバレテを招聘し、メソアメリカ後古典期後期（14世紀～1521年）のアステカ王国において儀礼的に使用されていたテマラカトル祭壇やコアトリクエ像などの意味に関する最新の研究成果を議論した。従来、古代文明の石碑の研究は主に美術史の分野で行われており、個々の意匠の意味を解釈しながら古代人の世界観を推測することが普通だった。これに対しナバレテは、クロノトープ（時空間）という概念を導入し、既存の美術史研究や、先スペイン時代の住民族文化に関して植民地時代初期に記された歴史文書を参照しながら、石碑には特定のクロノトープで生じた出来事や神話的事象が記録されているという立場をとる。そして石碑の前で儀礼を行ったアステカの人々にとって、石碑は過去を回想し未来を予見する道具、すなわちタイムマシンとして機能していたと考える。

フォーラムでは、ナバレテの発表に続いて、クロノトープ概念の有効性やアステカ以外の古代文明研究への適応可能性などが議論された。

台湾光点計画講座

「台湾客家文化を学ぶ」

日時：2015年7月11日（土）
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館
共催：台湾文化部「台湾文化光点計画（supported by Dr. Samuel Yin）」
企画：河合洋尚（国立民族学博物館）

国立民族学博物館（以下、民博）では、2015年1月から、台湾の多様な「族群文化」の主要な構成員の1つである「客家」に着目し、その歴史や文化を紹介するために、各種イベントを計画、実施している。その一環として開催されたのが本講演会である。

本講演会では、東洋のユダヤ人とも言われる客家の生活文化を、多様な視点から紹介する目的で開催された。講演者は、渡邊欣雄（国学院大学）、横田祥子（滋賀県立大学）、長野真紀（神戸芸術工科大学）の3名で、いずれも台湾の客家社会でフィールドワークをおこなってきた研究者である。渡邊は、実地調査の少ない1970年代から80年代の台湾客家社会の生活文化について紹介し、ステレオタイプ的な客家イメージとの違いについて説明した。続いて、横田は、近年の台湾客家社会で急増する東南アジア女性との国際結婚について紹介し、台湾－東南アジア間の親族ネットワークを解説した。他方で、長野は、台湾の客家村落の類型を提示したが、そのなかで中部の村落空間が、中国広東省に分布する囲龍屋と酷似していることを指摘した。現在の通説では、土楼や囲龍屋は台湾客家社会には存在しなかったとされるが、両者には空間認知のうえで連続性が見られるのではないかという仮説を、提示する内容でもあった。

今後は、講演会だけでなく、映画、工芸、音楽などを通して、客家文化への理解を多方面から深めていくイベントを、引き続き開催する予定となっている。

7月に引き続き開催された講演会

台湾の伝統住居である三合院